

古代ローマの別荘における窓とギリシア哲学との関連について

川本 悠紀子^{※1}

概要 本研究は、古代ローマ時代の別荘建築がギリシアの哲学にどれほどの影響を受けていたのかを探ろうとするものである。なかでも注目したいのは、窓や戸口などの開口部で、このような開口部を通しての視野や光の入り方や特定の事物への光の当たり方が、古代ローマ時代の別荘建設時の計画でどの程度考えられてきたのかという点で、ギリシアの哲学的思想という観点を手掛かりにしつつ検討する。古代ギリシアの哲學家たちと彼らに影響を受けた古代ローマ時代に書かれた文献史料の調査、ギリシアの哲学学校の現地踏査、そして古代ローマ時代に建てられた別荘での調査を通して本研究は実施される。

研究背景と目的

本研究は、古代ローマ時代に建てられた別荘建築が、古代ギリシア哲学にどのような影響を受けているのかを、文献史料・考古学的資料に基づき検証するものである。本研究の可能性を見出したのは、キケロが友人のアッティクスにあてた書簡にある。

「君は(私の家の)窓の狭さを批判するが、それは『キューロスの教育』を批判しているのだということをお伝えしておこう。私がまったく同じことを言ったところ、キュールスは、広い窓を通したと緑の眺めはあまり心地よくないと言った。なぜなら、眼の位置をAとし、見られる対象をBCとし、光線を……。あとはわかるだろう。もちろん、もしも我々がものを見るのが像の(眼への)投影によるのなら、狭い所では像は(捉えるのに)骨が折れるが、光線の流出は(狭い方が)うまくいく。もしも君が他のことについて批判があるなら、私は黙っているつもりはない。もしもお金をかける

ことなしに、それを直すことができるのであれば話は別であるが。(Cic. Att. 2.3 (SB 23, 前 59 年 12 月))」(根本・川崎訳)

この書簡自体は、以前より知っていたが、何を意図して書かれているのか、コメンタリーを読んでも理解することが出来なかった。それが次第にわかるようになったのは、キケロとアッティクスが追随する哲学の学派が異なるのに気が付いてからである。このテキストはキケロが学ぶ新アカデメイア派と、アッティクスが学ぶエピクロス派の考え方では、「物の見方」が異なって解釈されているため、その点について両者は議論を繰り広げているのである(川本 2022)。このテキストから、自邸の窓の狭さについてでさえ、古代ローマのエリートたちは哲学的思想を取り入れて依頼していたと理解できる。それでは、古代ローマの別荘はどれほどギリシア哲学の影響を受けていたのだろうか?この点について検討すべく、本研究助成に申請した。

^{※1} 名古屋大学 准教授

本研究を遂行する上で着目しているのは、作品中に登場する別荘や住宅の描写の在り方と個々人の哲学的背景、そして同時代に作られた別荘・住宅建築である。研究史でも知られているように、特に紀元前一世紀以降、エピクロス派の哲学がイタリア半島では広がりを見せており、哲学者シロはナポリにエピクロス派の哲学学校を創設している。ここで教育を受けたものの中には、ラテン文学の金字塔『アエネーイス』を書きあげたウェルギリウスや、彼の同時代の詩人、ホラティウスがいたとされる。また、後 79 年のウェスウィウス山の噴火に罹災した、ナポリ近郊のヘルクラネウムのパピルス荘は、キケロの同時代人のピソが所有していたとされており、そこにはエピクロス派の哲学学校の学頭、フィロデモスが滞在していたとされる。この別荘のように、具体的な居住者が明らかなものは少ないが、同時代に建てられた建造物はナポリ湾周辺に点在しており、中にはパピルス荘のような規模や装飾計画（例えば哲学者たちの胸像など）を持つものもある。つまり、これらの別荘や大規模住宅もまた、古代ギリシアの哲学との関連性をひもとく手がかりとなるだろう。

本研究では、特に紀元前一世紀から後一世紀に書かれた文献史料や、遺跡を通して、どの程度古代ローマ時代の住宅や別荘が古代ギリシアの哲学の影響を受けていたのかを検討してきた。その中でも、エピクロス派の哲学における言及の多い、光に関連する空間、すなわち、開口部とそこからの視野や光の入り方・物への光の当たり方を史資料から探る。このような調査を通して、究極的にはギリシア哲学の影響が個人の建物の中に留まっていたのか、あるいは社会全体にもその影響が垣間見られるのかを明らかにしたいと考えている。

研究成果と考察

二年に渡り、古代ギリシアの哲学が別荘に与えた影響について、実際の古代ローマ時代の別荘への訪問、ギリシアの哲学者アリストテレスの出身であるマケドニア王国に残る遺跡や実際の哲学学校への訪問、史料調査をもとに検討してきた。本研究では窓や開口部に焦点をあてることで、川本が科研費（若手研究）で行っている研究を補強することができた。

【史料編】

先に言及したキケロの書簡の視覚と窓から見える景色に関する一節は、プラトンが『ティマイオス』（*Plat. Tim.* 45a-c, 46a-b）で洞窟の比喻や鏡を例に挙げて説明した視覚の在り方に関する哲学や、エピクロスが『ヘロドトス宛の手紙』で書いた視覚について説明した際のテキストを下敷きにしている（*Epic. Ep. Herod.* 46a-52）。しかし、これらの古代ギリシアの哲学者たちが著したテキストは、いかに人間が物を視覚的に知覚するかを論じているにとどまっており、窓は登場しない。調査の結果、視覚の議論に住宅や窓を持ち込んだのは、古代ローマ時代のエピクロス派の哲学者ルクレティウス（前 94 頃-55 年）の『物の本質について』からの可能性が高いとわかった。

たとえば、「我々は往々、扉を閉ざした中で会話が行われているのを知ることがあるが、明らかにこの理由は、声が物の曲りくねった通孔を無事、損なわれることなく通過することができるからであって、〔視覚に訴える〕映像の方はこれを行わないからである。即ち、あらゆるものが透して見えるガラスの如き物の場合のように、直線的な通路を通らない限り、映像は全く破壊されてしまうからである」（*Luc.* 4. 595 ff.、樋口勝彦訳）は、物をどのように人間が視覚的に知覚するのかを窓ガラスを通して説明

【様式 2】

したものである。このほかにも同書には、映像が鏡や窓を通してどのように映るかを論じたテキストなどもある (Luc. 4. 269 ff.)。つまり、『物の本性について』では、庭の植栽についての言及はないものの、人間の視覚について哲学的に論じる際に、それ以前には見られなかった住宅空間や外界の見え方を引き合いに出しているのである (鏡を複数置いて住宅内を隅々見るという話やアトリウムや円柱についてなど)。

アッティクスはエピクロス派の哲学を学んでいたので、この史料を知っていただろうし、キケロはルクレティウスの詩を知っていたばかりか (Cic. *QFr.* 15.3)、著者亡き後の前 54 年に『物の本性について』を少しだけ編集したとヒエロニムス (後四世紀) は述べている (Schoene, Hieronymus, Vol. II., p. xxviii, note 2)。これらのことから、キケロとアッティクスは共に、ルクレティウスの作品を読み、内容を理解していたからこそ、先の書簡で「あとはわかるだろう」といった言い回しをしたのだろう。

哲学議論の中で住宅の内部空間や窓、扉などを用いるようになったのは、ルクレティウス以降であろうと本研究によって導きだしたが、哲学の関連でいうと、エピクロスの哲学が都市の中にもたらされたことで「人々が都市の中に「荘園 (*horti*)」という名前のもとに「ウィラ (*villa*)」や「畑 (*ager*)」を所有することになった」とする大プリニウス (後一世紀) の史料も存在する (Plin. *NH* 19.19.50-51)。これと併せて考えたいのは、共和政末期以降、都市ローマでは有力者によって様々な「荘園 (*horti*)」が作られたことである。カエサルが作った *Horti Caesari* や、皇帝アウグストゥスの友人にしてウェルギリウスらのパトロンとなったマエケナスの *Horti Maecenatis* などが例としてあげられる。昨今、マエケナスに庇護された文学者の多くはエピクロス派の哲

学を取り入れた著作を書いていたことが明らかになっているが、裏を返せば、作家がどの有力者コミュニティと接触し、利権を得たいかによって、自身の哲学の志向を変え得たということを意味しているのだろう。

いずれにせよ、キケロやカエサルが生きた共和政末期に流行したエピクロス派の哲学は、別荘や住宅のみならず都市の在り方にまで少なからぬ影響を与えていたこと、哲学と住環境との関係性は古代ローマ時代に入ってから色濃くなっていくと判明した。今後はエピクロス派の哲学とローマ時代になって流行したエピクロス派の哲学者たち (ルクレティウス、フィロデモスなど) に焦点をあて、さらに後一世紀になると流行し始めるストア派の哲学者 (セネカ、ムソニウス・ルフスなど) にも目を向ける必要があるだろう。

【考古学編】

本研究助成を用いて、2023 年度にはギリシアでの調査、2024 年度 3 月には英国での資料調査を実施した。

古代ローマの別荘では、有力者たちが庭や列柱廊の中で哲学議論をしていたという話が研究書の中ではしばしば登場する。先述のキケロも、たとえば『トウスクルム荘対談集』の中でギリシアの哲学者に倣って当時の権力者や知識人らが別荘に集い哲学議論をしていた様を描いている。これまでは、このような哲学と別荘との関連性は、キケロのような知識層がアテナイに赴いて研鑽を積んだ経験に基づいていると考えられてきた。しかし研究を進める中で、哲学と別荘、ひいてはアテナイの哲学学校と古代ローマ別荘との関連はより深いのではないかと考えるに至った (川本 2022)。

そのため、ギリシアでの調査では、アリストテレスの出身地である北ギリシアの遺跡に訪問し、アテナイで発掘された哲学学

【様式 2】

校アカデメイアとリュケイオン（図 1）にも訪問した。



図 1 リュケイオン、アテネ

現在のアテネで訪問が可能な古代ギリシアの哲学学校は、プラトンが創設したアカデメイアとアリストテレスが創設したリュケイオンである。前者については 20 世紀半ばに発掘が行われており、後者については 21 世紀に入ってから発見された。アカデメイアは、相次ぐ破壊や古代ローマ時代になってから（ハドリアヌス帝期）刷新されたこともあり、プラトンの時代の遺構がどのようなものであったのかはわからない（礎石が点々とあるのみで、また木々の中にあるため、その全容をはかり知るのは困難である）。他方リュケイオンでは、大きな列柱廊や浴室群が発見されており、元の形が把握可能な状態にあった。

このリュケイオンの列柱廊の規格は、アテネよりも先に訪問したペラ（図 2）で見た列柱廊と似通っており、ペラでアレクサンドロスの教師を務めたアリストテレスがリュケイオンの列柱廊の規格の決定に関わっているのではないかと考えたに至った。規格やプロポーションといった要素の類似性に基づいて文化の継承を立証するのは容

易ではなく、私自身ポンペイ第一様式の壁画とマケドニア王国の壁画の類似性について先行研究が指摘していてもその信憑性を疑っていた。しかし、実際に現地赶赴いて物を見ることを通して、マケドニア王国の建造物がリュケイオンに影響を与えていた可能性を排除すべきではないと考えるに至った。今後は、現地調査を通じて得た「感覚的」な気づきを史料的に、あるいは考古学的な知見に基づいて論証することを目指したいと考えている。

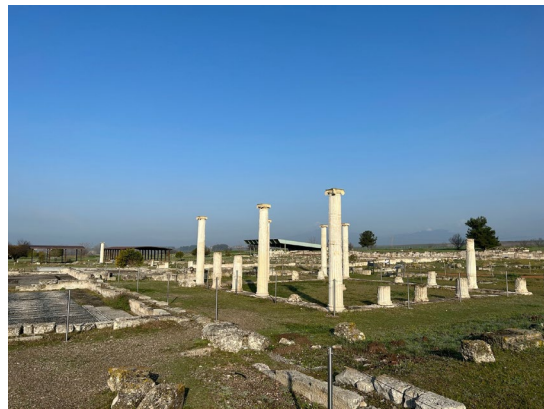


図 2 ペラ

2024 年 3 月に行った英国での調査は、Institute of Classical Studies での資料調査が主であった。しかし、イタリア半島から遠く離れたブリテン島でも、特に後一世紀半ば以降に古代ローマの時代の別荘が建てられており、中にはフィッシュボーンに残る別荘遺構のように、ナポリ湾岸に立つ別荘のように大規模なものも発見されている。それゆえ、今回はローマ時代 *Victis* と呼ばれていたワイト島に残る古代ローマ時代の別荘で現地調査を行うことにした。

ワイト島には、古代ローマ時代の遺構が 8 例発見されているが、中には海岸線に建っていたことから現在は失われてしまったものもある。また、訪問時期が観光シーズ

【様式 2】



図 3 Brading Villa 出土のガラス窓

ンではなかったこともあり、Brading Villa にのみ訪問することができた。この古代ローマ時代の別荘は、ワイト島に残る古代ローマ遺跡の中で最も大規模かつ保存状態が良いもので、別荘の壁面の一部、壁画、さらには舗床モザイクが著名である。本研究助成と関連があるのは、本別荘から三種類の異なる色での窓ガラス（図 3）が発見されていること、そして日時計と天球儀の脇で着座する哲学者のモザイク（図 4）が装飾に含まれている点である。

ワイト島は、英国本土と比べると気候が温暖であるとはいえ、イタリア半島と比べると温暖とは言えない。そのため、窓ガラスをはめ込む開口部を持つ窓が本別荘にあったことは新たな発見であった。他方、哲学者のモザイクについてはかねてから知っており、イタリア半島の古代ローマ時代の別荘の装飾に用いられていた哲学者のモチーフがブリテン島の別荘にまで伝わっていたことを実際に確認することができた。

【結び】

本研究では、共和政末期から帝政初期に作られた古代ローマ時代の別荘とギリシア哲学との関連性について、窓や開口部を中心に検討をしてきた。ギリシア哲学からの影響を知るために北ギリシアに赴き、アテナイの哲学学校への現地踏査を行うことで哲学学校の建築構造の源流を辿ることがで

きた。また別の研究助成金を用いて、前一世紀以降に建てられたイタリア半島に残る古代ローマ時代の別荘の調査を行い、それぞれの別荘に共通する建築空間を検討し、それらの建築空間と史料上での言及の比較を行った。ブリテン島のさらに南にあるワイトの別荘調査では、イタリア半島の古代ローマ時代の別荘で確認された建築空間や装飾プランが、その後の異なる地域の古代ローマ時代の別荘でどのように継承されていたのかを確認することができた。

本研究助成により、古代ローマの別荘と哲学とが結び付いたのは前一世紀頃であることを史料・遺構に基づき明らかにすることができた。今後は、哲学者の移動に焦点をあてて検討を進めていく予定である。

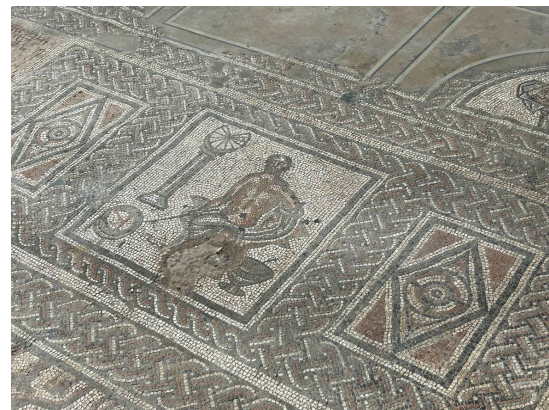


図 4 Brading Villa の哲学者モザイク

【参考文献（本報告書で引用したもの）】

エピクロス著・出隆・岩崎允胤訳『エピクロス 教説と手紙』岩波文庫、1959 年。
ルクレティウス著・樋口勝彦訳『物の本質について』岩波文庫、1961 年。
キケロー著・根本和子・川崎義和訳『キケロー選集 13 書簡 I アッティクス宛書簡』岩波書店、2000 年。
川本悠紀子「キケローの書簡にみるアテナイの哲学学校と古代ローマの別荘」『古代地中海世界と文化的記憶』、2022 年。